



猪野謙二教授年譜

(Citation)

国文神戸, 3:131-134

(Issue Date)

1979-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481965>



猪野謙二教授年譜

大正二年（一九一三）

4月 二日、宮城県仙台市光禪寺72通番地に生まれる。

大正五年（一九一六） 13歳

3月 東京府北多摩郡神代村深大寺小学校卒業。

4月 東京府立第六中学校（現新宿高校）に入学。

昭和六年（一九三一） 18歳

3月 右中学校卒業。

4月 第一高等学校文科甲類に入学。

昭和九年（一九三四） 21歳

3月 右高等学校を卒業。

4月 東京帝国大学文学部国文学科に入学。

昭和十二年（一九三七） 24歳

3月 右大学を卒業。

4月 東京都私立東調布高等女学校に就職。

昭和十三年（一九三八） 25歳

9月 東京都私立京華中学校に転ず。

昭和十四年（一九三九） 26歳

12月 臨時召集により東京第二陸軍病院に応召。翌一五年

六月衛生二等兵。同一二月衛生上等兵。翌一六年一

二月衛生兵長となる。

昭和十七年（一九四二） 29歳

12月 衛生伍長となり、召集解除。

昭和十八年（一九四三） 30歳

7月 臨時召集により東京第二陸軍病院に再度応召。翌年

衛生軍曹となる。

昭和二十年（一九四五） 32歳

9月 敗戦により召集解除。

昭和二十一年（一九四六） 33歳

5月 法政大学高等師範部講師を委嘱される。

昭和二十四年（一九四九） 36歳

3月 財団法人京華学園理事（昭和一七年以降）を退任。

昭和二十五年（一九五〇） 37歳

7月 法政大学文学部講師を委嘱される。

昭和二十六年（一九五一） 38歳

3月 法政大学高等師範部廃止と共に講師の委嘱を解かる。

昭和二十九年（一九五四） 41歳

3月 京華学園並びに法政大学文学部講師を解任。

4月 神戸大学助教授（文学部）に就任。

昭和三年（一九五八） 45歳

8月 神戸大学教授（文学部）に昇任。

昭和三四年（一九五九） 46歳

1月 神戸大学文学部教務委員に併任される。

昭和三五年（一九六〇） 47歳

1月 右委員に再任される。

昭和三七年（一九六二） 49歳

4月 神戸大学評議員に併任される。

昭和四〇年（一九六五） 52歳

4月 神戸大学評議員に併任される。

6月 神戸大学文学部長に併任される。

昭和四二年（一九六七） 54歳

6月 神戸大学文学部長に再任される。

昭和四三年（一九六八） 55歳

4月 神戸大学文学部長の併任を解除される。

神戸大学評議員に併任される。

神戸大学大学院文学研究科（同年度設置）の担当を

命ぜらる。

昭和四四年（一九六九） 56歳

8月 神戸大学評議員を辞任する。

昭和五〇年（一九七五） 62歳

3月 神戸大学を辞職する。

4月 学習院大学（文学部）教授となる。

昭和五一年（一九七六） 63歳

4月 神戸大学名誉教授の称号を与えられる。

神戸大学在職中に非常勤講師として次の諸大学に出講す。

法政大学文学部

東京都立大学文学部

同志社大学文学部

京都女子大学

学習院大学に就職後、大正大学文学部に非常勤講師として出講。

所属学会並びに協会。（現在）

日本近代文学会（理事）

日本文学協会（委員）

新日本文学会

日本文学協会 その他

右以外の学際的な活動経験

日本学術会議選挙管理委員会

哲学史学文学学会連合評議員

日本学術会議会員（第一〇期） その他

〈年譜後記〉

出自に關して。

祖父猪野忠敬（久米部正親、一名沖見）は元新撰組隊員。維新後、晩年は仙台市に隠棲、日本画を描きて生計を立つ。（『日本文学の遠近Ⅱ』所収の「八丈島共和国」への夢——無名新撰組隊士の人生」に詳し。）

父は山形県米沢市外成島村の中農の次男。陸軍幼年学校、士官学校を出て陸軍軍人となり、忠敬の養子となる。肺結核のため陸軍大尉で退職、大正一五年三七才で死す。

母はもと彦根藩士の家に生まれ、その父は仙台の鉄道官吏。宮城県立第一高女を卒業。画才ありたり。大正六年二五才で早逝。

父死去後は母方の祖母、叔父等の世話になって成人す。小学校は仙台市上杉山通小学校、群馬県高崎市南小学校、東京市麹町区永田町小学校、東京府豊多摩郡井荻村桃井小学校、同北多摩郡深大寺小学校を転々す。

一高在学中は三年間寮生活を送り、大学入学後は日本橋区蠣殻町（水天宮裏）の叔父のもとで過す。友人立原道造の家（同区橋町）の近くであった。

師友その他に關して

中学時代には、近藤忠義（のち東京音楽学校、法政大学等の教授、国文学者）、安藤一郎（のち東京外大教授、英文学者、詩人）等の諸先生から文学的感化を受く。

高校に入つては二年生のとき寄宿寮の図書委員となり寮の図

書室に購入せる新刊書の紹介的書評（大森義太郎「唯物弁証法読本」、須井一「清水焼風景」その他）を、「向陵時報」という学内の新聞に載せたのが、ものを書きはじめたきっかけとなる。それが縁となつてか、杉浦明平、立原道造、生田勉らの前委員から、文芸部委員になるよう勧誘を受けたがその任に非ずとして断わる。しかしそのことが刺激となり、三年生のとき（昭和八年）の「校友会雑誌」に二篇の短篇小説と当時大島の三原山噴火口に投身自殺した友人武田昌人の追悼文を書く。

大学に入ると同時に、高校時代同年代だった立原道造、江頭彦造、並びに江頭の友人で福岡高校出身の沢西健と同人雑誌「偽画」をはじめめる。三号で廃刊としたが、つづいて、杉浦明平（一年以上級生、他は同学年）、寺田透、立原道造、その他とともに「未成年」を発刊、立原は昭和一四年に病死、沢西は南方の戦線で戦死したが、これらの文学上の交友は今日なおつづいている。また、杉浦の紹介で知った田宮虎彦らとも親交がつづいている。

また文学関係以外では、高校時代から丸山真男や埴作楽（現在茨城県歴史館勤務の歴史学者兼作家）その他とも親しく、丸山とは宮城・福島県境の小さな禅寺に一カ月余もともに暮らしたことがある。（『日本文学の遠近Ⅱ』所収の「二・二六前夜の青春」その他にやや詳し。）

国文学関係では、戦後、中学時代の旧師近藤忠義氏と、その紹介によって知った永積安明氏や西郷信綱、広末保氏らと日本文学協会などを中心に研究活動を行う。近代文学研究の領域で

は、とくに稲垣達郎、瀬沼茂樹、川副国基、柳田泉、勝本清一郎ら諸先学の厚誼を得た。

大学では藤村作、久松潜一、橋本進吉、池田亀鑑その他の諸師に学んだが、怠惰な学生で研究室などにはほとんど寄りつかなかった。

なお、戦後は学生時代からの友人杉浦や寺田や丸山のほか、野間宏、木下順二、瓜生忠夫らとも交わり、岡本太郎その他を加えた「未来の会」という集まりも数年にわたってもった。

神戸大学では、東京ですでに相知っていたフランス文学の小島輝正のほか、永積安明、島田勇雄、藤岡忠美ら国文科の諸氏だけでなく、哲学者の清水正徳、橋本峰雄、井上庄七、東洋史学者の岩見宏、西洋史の市川承八郎、社会学の杉之原寿一、中国学の山口一郎、英文学の宮崎芳三、西洋美術史の池上忠治、その他部門に多くの友人をもち、並々ならぬ人間的、学問的な感化を受けた。二十年来の卒業生諸氏についても同じである。さらに協同の雑誌や講座の編集の仕事などで知遇を得た竹内好、桑原武夫、中野好夫らの諸先学の学恩はきわめて大きい。

注 この年譜後記は、編集者の要望によって猪野先生御自身が走り書きされたものを、そのまま清書したものである。(尾末)